

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 菊池有希

菊池有希氏の「日本におけるバイロン熱」は、19世紀はじめに活躍したイギリスのロマン派詩人バイロンが、日本においてどのように受容され、語られたかを、明治初期から昭和期までを視野に入れて論じた労作である。ここに「バイロン熱」とするのは、バイロンを受容した日本の知識人たちが、バイロンに対し強い気分的な思い入れを示し、「罹患」と形容するような文学的、思想的熱狂をあらわしたことによる。そのような現象を、日本の文学的、思想的文脈に位置づけようとするのが、菊池氏の研究の主眼である。

バイロンは、フランス革命とナポレオンの登場という、ヨーロッパの政治的激動期に登場し、旧体制から市民社会への過渡期において、自由の精神を体現する詩人としてもてはやされた。その作品に描かれる「バイロニック・ヒーロー」は、バイロンその人のイメージとも重ねあわせられつつ、当時の読書界に大きな影響を揮った。同様のことが、新旧の価値観がはげしく闘ぎあった明治期以降の日本にも観察される。バイロンという詩人とその作品が日本の知識人たちにどう受けとめられたか、それを明らかにすることが、日本の精神風土そのものを逆照射することにつながるというのが、菊池氏の主張である。

本論文は、本論四章と、序章および終章からなる。以下、論文の構成にしたがってその概略を述べ、適宜これに対する審査委員の意見を記す。

序章では、バイロンの人物と文業、および欧米でのバイロン研究の概略が紹介されたあと、日本におけるバイロン受容に関する先行研究が確認される。その上で、本論文が日本における「バイロニズム」を包括的に扱おうとするはじめての試みであること、またバイロン受容における無理解・誤解等を積極的に評価することで、「近代的自我」の時代的相貌の描出を試みようとするねらいが表明されている。

この部分について審査委員からは、バイロンの伝記的事実やバイロンが反抗したものが何であったかの記述に不十分な点があること、また「バイロニズム」の模倣、演技としての側面を、より強調すべきではなかったかとの指摘があった。

第一章では、まず明治初期のバイロン言及を丹念に辿りながら、「厭世詩家」としてのバイロン像が定着してゆくさまが、北村透谷の評論を中心に論じられる。バイロンについては、早い段階で長澤別天、森鷗外らの紹介があったが、明治期において他を圧して大きな意味を持つのは、北村透谷のバイロン受容である。透谷はH.テューヌの文学史記述などを参照しつつ、バイロンの『マンフレッド』や『チャイルド・ハロルドの巡礼』を読み、そこに詩人としての自己劇化の参照枠を見だし、「想世界」と「実世界」の対立を文学的思索の中心的課題として意識化する。そのなかで、世俗的価値に埋没してしまいかねない時代風潮に抗して、内面的価値を擁護する立場が「厭世」という精神のあり方として浮かびあがってゆく過程が、透谷の個々の評論の読解において跡づけられてゆく。

第二章では、第一章の議論をうけて、さらに透谷の内面のドラマが掘り下げられる。透谷は、バイロニック・ヒーローのニヒリズムに魅了されつつ、ニヒリズムに帰着する自我の劇ではなく、ニヒリズムを回避する自我の劇を演じようとする。また、自我の拡張が他

我への暴力性につながる事態を避けようとする。「死に至る病」としての「負のロマン主義」の克服としてあったそのような試みが、透谷の評論や戯曲において読みとられる。

第一章と第二章について審査員からは、キリスト教に反逆したバイロンが、透谷においては、キリスト教と同時に受容されることの不可解さへの意識が足りないのではないか、M.ペッカムによる「負のロマン主義」といった用語の図式的な適用が、本論のようなテキスト解釈を本領とする議論においては、必ずしも有効ではないのではないか、『楚囚之詩』や『蓬莱曲』といった透谷の詩に関しては、表現自体により密着した分析が求められるのではないか、といった指摘があった。

第三章は、透谷とともに『文学界』に拠った同人たちが、透谷の自死のあと、バイロン熱といかに関わったかを論じる。透谷の没年である明治二十七年は、すでに「バイロン熱」が退潮を迎えつつある時期にあたっていた。『文学界』同人の、島崎藤村、平田禿木、戸川秋骨らは、「縄墨打破」の恋愛詩人として捉えていたバイロンと次第に距離を取ろうとする。その際彼らは、バイロニズムを国民文学の観点から再評価しようとしたり、その美的価値を重じたり、文学研究の研究対象とみなそうとしたりした。ただし、島崎藤村一人のみにおいて、バイロン熱は長く持続し、いわゆる「新生」事件において、一気に再燃するにいたる。その間の経緯が、バイロンの「大洋の歌」などの受容と絡めて論じられる。

第四章は、これまで「バイロン熱」に関してはほとんど論じられることのなかった、日清・日露戦争期から第二次大戦後までを扱う。明治三十年代において精力的にバイロンの紹介につとめた木村鷹太郎は、やがて日本主義化し、国家主義に接近してゆくが、高山樗牛は、国家主義から遠ざかるかたちでバイロンを受容する。日露戦争後はバイロン熱は著しい退潮を示し、土井晩翠において、バイロンはもはや自己表現の参照枠としての機能を失うにいたる。その後低調であったバイロン熱は、昭和十年代にいたって、にわかには復活するが、そのなかで重要な人物として浮かびあがるのが、林房雄と阿部知二であった。第四章の後半は、林と阿部のバイロン受容を取りあげて、「転向」の問題や戦前戦後の思想界の動向との関連を論じている。第三章と第四章について審査委員の評価は高く、今後さらにこの時期についての研究が進展することが望まれるとの意見があった。

終章は、本論全体の議論をふりかえりつつ、バイロン熱という現象に着目することで、近代日本の思想・文学における重要な論点と、時代の変化を辿ることが可能となることを改めて確認している。

本論は、明治期から昭和の戦後にいたる時代の「バイロン熱」を本格的に論じた、はじめての論文である。その意味で、本論が比較文学研究に対してなした貢献はきわめて大きい。また、日本におけるバイロン熱を論じた先行研究を徹底して渉猟し、自説との異同を一つ一つ確認するさまは、学問的手続きとして模範的な態度を示している。その一方で、英文学研究、ロマン主義研究の最新の動向には、やや暗いと言わざるを得ない。また、文学理論の援用において、テキスト読解の現場での柔軟性が求められるという指摘も審査委員から寄せられた。ただし、以上のことは、本論文が挙げ得た優れた学問的成果を決して損なうものではないことも同時に確認された。

よって本審査委員会は、菊池有希氏の論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。